



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3125号 2016.7.13 発行

高齢者世帯、全体の4分の1超す 1271万世帯 15年6月時点

日本経済新聞 2016年7月12日

厚生労働省が12日発表した国民生活基礎調査によると、2015年6月時点で高齢者世帯は1271万4千世帯で、初めて全世帯の4分の1を超えた。高齢化の進行で高齢者世帯は今後も増加が続く見込みで、医療や介護などの社会保障費が膨らむ要因になる。

「高齢者世帯」は65歳以上の人のみか、これに18歳未満の未婚の人が加わった世帯をさす。前年より50万世帯増えて、全世帯の25.2%を占めた。高齢者世帯は数・割合ともに調査開始以来の最大を記録した。

14年の1年間の1世帯あたりの平均所得は前年比2.5%増の541万9千円で、3年ぶりに増加した。生活意識をみると、暮らしの状況を総合的に「苦しい」と感じている世帯主は15年に60.3%で、前年の62.4%から減少した。1990年以降続いていた増加傾向から減少に転じた。厚労省は「労働者の所得の増加が一因だと考えられる」としている。

国民生活基礎調査は厚労省が1986年に始めた。全国の世帯を無作為に抽出し、世帯状況は4万6634世帯、所得は6706世帯から有効回答を得た。

風船がつなぐ復興の願い 熊本から感謝の寄せ書き

神戸新聞 2016年7月13日

熊本県荒尾市の有明高校から届いた寄せ書き＝篠山市、和寿園



復興への願いを書いた風船を飛ばす和寿園祭の参加者（同園提供）＝篠山市、和寿園



特別養護老人ホーム和寿園（兵庫県篠山市高屋）の利用者らが熊本地震の被災地へのメッセージを書いて飛ばした風船が、人の手を伝って熊本県荒尾市内の高校に渡り、このほど高校生から同園にお礼の寄せ書きが届いた。「兵庫からのメッセージを頂いて心強いです」など感謝の言葉がつづられている。

風船は、同園が開く恒例の催し「和寿園祭」で6年ほど前から毎年飛ばしている。例年は篠山をアピールするメッセージを風船に書いており、滋賀県や長野県、遠くは静岡県からも返事が届いたことがあるという。

今年は6月12日に開催し、熊本地震の被災地の復興を願って「1日でも早く安心して生活できるよう願いを込めます」と書いて150個を飛ばした。しかし雨のためか、今年は多くが市内など周辺で落ちてしまった。

同園の隣にある西紀中学校にも落下し、一つが男性教諭に届けられた。教諭は、熊本に届けたいと同県玉名市出身で篠山小学校の山中唯教諭(29)に託し、山中さんは帰省した6月下旬、母親で同県荒尾市の有明高校教諭の二宮法子さん(54)に手渡した。

「(和寿園の利用者らが)たとえ体が思うように動かなくても、思いを伝えようとしてくれたことに温かさを感じ、ありがたい気持ちになった」と二宮さん。普段、地元の福祉施設で実習している同校福祉科1~3年生90人が「何かできることはないか」と考え、寄せ書きを作ることにした。

高校生らは「荒尾市は被害はあまりひどくありませんでしたが、熊本城が崩れてびっくりした」「心配のメッセージうれしかったです」「熊本全員で復興に向けて頑張りたい」など思いや感謝を寄せた。

和寿園の職員の男性(36)は「手から手に渡って福祉を学ぶ若い人からメッセージが届き、とても驚いた。利用者も喜んでいきます」と笑顔を見せた。(井垣和子)

学童保育所の経営者、男児にわいせつ行為

日テレニュース 2016年7月12日

自らが経営する学童保育所に通う小学校高学年の男の子にわいせつな行為をしたとして男が逮捕された。

強制わいせつの疑いで11日に逮捕されたのは、茨城県水戸市の学童保育所の経営者・坂本瞬容疑者(31)。警察によると坂本容疑者は、去年10月、自らが経営する学童保育所に通っていた小学校高学年の男の子を水戸市内の自宅に連れて行き、わいせつな行為をした疑いが持たれている。わいせつ行為を知った同僚に自首を促され、坂本容疑者は「児童に対して、性的虐待をしてしまった」と自ら110番通報したという。

坂本容疑者の携帯電話からはわいせつ行為を撮影した動画が見つかったということで、警察は、他の児童にも同様の行為を行っていないか調べる方針。

神戸市立校 過去5年で体罰112件

神戸新聞 2016年7月12日

近年の体罰の状況などについて話し合った検討委員会=神戸市役所



「神戸市体罰を許さない学校づくり検討委員会」の2016年度初会合が12日、神戸市役所であった。同市立小中高校、特別支援学校で11~15年度、殴る、蹴るなど計112件の体罰があったことが報告され、撲滅に向けた研修の在り方などを話し合った。

大阪市立桜宮高校の体罰問題などを受け、神戸市教育委員会が13年度に設置。大学教授や弁護士、校長、保護者ら13人で構成する。

初会合で、市教委は近年の体罰の状況を報告。把握した中で分析すると、授業中が38%、部活動中が22%を占めたという。市教委担当者は「ベテラン教員が、子どもを以前と同じように指導しても伝わらず、戸惑っている様子もみられる」と話した。

委員からは「教員個人の資質も関係している。教員同士で『今日は表情が厳しいよ』などと声を掛け合うことも大切」「発達障害のある子どもたちへの対応が課題」などの意見が出された。

今回は11月に開く予定。(上田勇紀)

「事故」基準あいまい影響 医療事故調査制度 低調な報告数

中日新聞 2016年7月12日

医療死亡事故の原因究明や再発防止を図る「医療事故調査制度」がスタートして9カ月がたった。医療機関で予期せず患者が死亡した場合、医療機関から第三者機関への報告が義務づけられ、原因を究明する院内調査が実施される。しかし、その報告数は国が予測した水準を大幅に下回っており、6月には国が一部を見直した。中部地方を中心に関係者の意見から、制度導入からこれまでに見えてきた課題を探った。(室木泰彦)

制度開始に伴い、第三者機関「医療事故調査・支援センター」の役割を担い、全国の医療機関から報告を受け付けている日本医療安全調査機構(東京)によると、昨年10月から6月末まで9カ月間の報告は計285件。当初、国は過去の実態などから年間1300~2千件の報告を予測し、9カ月では970~1500件となるが、これを大幅に下回る。

都道府県ごとの件数は公表されていないが、愛知、岐阜、三重、静岡、長野、滋賀、福井、石川、富山の9県の東海北陸は34件。ブロック別にみると、関東信越の123件が最多で、東北の10件が最少だ。

■「罰則なし」の義務

報告は義務付けられたが、しなくても罰則はないことが、件数の少なさを招いているという指摘は多い。約40年間にわたり医療訴訟で患者側代理人を務めている名古屋市の加藤良夫弁護士(68)は「医療機関は、報告すると責任追及されると考えがち。しかし、『罰則がないから報告しなくてよい』では、制度が成り立たない」と危惧する。

一方、これが実態を表すとの意見も。愛知県の医療機関で予期せぬ死亡事例があったときの相談窓口となる県医師会で、6月まで医療安全担当を務めた細川秀一理事(60)は「積極的に医療事故対策に取り組んできた愛知は、冷静に対応できている。病院などが過敏になり、やたらと報告が多い県もあると聞く」と指摘する。

5月下旬、名古屋市で開かれた制度を考えるシンポジウム。「医療機関は遺族の立場で検討すべきだ」。医療事故の遺族の立場で登壇した「患者の視点で医療安全を考える連絡協議会」(千葉県浦安市)の永井裕之代表が訴えた。

制度は、事故があった医療機関が報告が必要と判断することが出発点となる。報告に続く院内調査に不服があれば、遺族はセンターによる再調査を求められるが、そもそも医療機関が報告しないと決めた事例について、異議を申し立てる手段はない。厚生労働省は6月、報告するかどうかについて、遺族の意向をセンターが医療機関に伝えられるように見直した。

■「予期したか」否か

報告の少なさに関しては、医療事故の判断基準があいまいで、医療機関が都合よく解釈できる余地があるという指摘もある。制度の基となっている改正医療法では、報告が義務



づけられているのは病院長ら管理者が「予期しなかった」事例としている。裏返すと「予期していた」場合は報告不要ということだ。

国は、高齢であることなどのリスクは「予期」に当たらないとしている。患者の経過などを踏まえて死亡の可能性を事前に本人や家族に説明しているか、カルテなどに記録していることが必要。しかし、どの程度、具体的に死亡する可能性を示していれば、予期していたことになるのか明確な基準はなく、管理者の判断次第だ。

シンポジウムで藤田保健衛生大副学長の杉岡篤教授（肝胆膵（すい）外科学講座）も「非常にあいまい。恣意（しい）的解釈がいくらでもできる」と指摘した。6月の見直しでは、この点についても検討され、全国統一の基準をつくるよう通知された。

調査で、医療機関の処置に問題があったと結論づけられた場合でも、制度は補償に関する手続きを含まないため、遺族の納得を得られないこともある。愛知県医師会によると、医療機関は調査結果を遺族に説明するが、遺族は「それで終わりですか」と首をかしげることが多いという。医療事故の名称が「医療過誤」を連想させ、当事者の医療機関が遺族に説明するため、遺族は謝罪、補償されるものと思ってしまうためだ。

遺族が補償を求めたり、刑事告訴をしたりする場合は、訴訟を起こすなどの手続きが必要だ。加藤弁護士は「制度は再発防止が目的で、遺族救済ではない。しかし、将来的に救済と連動させる必要がある」と話している。

医療事故調査制度 再発防止に向けて、事故原因などを広く医療関係者が情報共有する目的で、2015年10月に始まった。全国約18万の医療機関と助産所が対象。治療や検査などで患者が予期せず死亡した場合、第三者機関への報告、支援団体（医師会や大病院など）の支援を得ての院内調査、遺族への説明が義務化された。厚生労働省が今年6月下旬に一部を見直した。

アテ積み木 幼児に 保育所で木育ワークショップ

中日新聞 2016年7月13日

紙やすりで能登ヒバの積み木を磨く園児たち＝
輪島市鳳来保育所で

輪島市地域おこし協力隊・山本さん考案

輪島市地域おこし協力隊で里山担当の山本亮さん（29）が考案した、市の木である能登ヒバ（アテ）を生かした積み木を幼児に触れてもらい、環境を守る大切さを感じてもらおう「木育ワークショップ」が12日、輪島市鳳来保育所であった。園児らは手にして感触や香りを楽しんだ。（山本義久）



抗菌と防虫性があるアテの積み木は、金沢市の「木作りおもちゃ工房なかやま」に製作を依頼した。積み木は昨年八月から、市のふるさと納税の返礼品になっている。

今年三月から、同協力隊で福祉担当の羽村龍さん（36）の協力を得て、積み木製作の仕上げとなる磨き上げ作業を、障害者の就労支援に取り組む施設「一互一笑（いちごいちえ）」（輪島市宅田町）の通所者に委託した。八月からは金沢市内のギフトショップで一万円前後で販売を予定している。

ワークショップでは、地域おこし協力隊の二人とおもちゃ工房スタッフが、園児十九人と保護者に、紙やすりを使って積み木を磨く方法を教えた。園児は四角や円形などの角を紙やすりで磨いた。船板千凜（せり）ちゃん（5つ）は「磨いたらすべすべになり、面白かった」と笑顔で述べ、母親の佳恵さん（36）は「香りがよくて、木の優しさを感じていいですね」と話していた。

園児の作業を見学した一互一笑の通所者は「楽しそうに遊んでもらえてうれしい。今後

も仕事にやる気ができます」と語った。市は市内の七つの公立保育所に配布しており、市福祉課担当者は「木に触れることが環境を守ることにつながっている。このことを感じてもらう木育が広まってほしい」と期待を寄せた。



高知)「ナツボラ2016」完成 夏のボランティア紹介

朝日新聞 2016年7月13日

夏のボランティアガイドブック「ナツボラ2016」の表紙

高知県内の今夏のボランティア情報をまとめたガイドブック「ナツボラ2016」が完成した。県内の高校や大学、専門学校、市町村役場などで入手できる。

ボランティアの担い手拡大を目指した取り組みで、今年で3年目。夏のイベントや子どもたちの学習支援、障害者施設の手伝いなどを幅広く紹介し、昨年も延べ916人が参加。うち約半数がボランティア活動は初めてだったという。

最新情報は公式ブログ「なっちゃんのナツボラ」(<http://blog.canpan.info/natsubora/>)参照。問い合わせは県ボランティア・NPOセンター(088・850・9100)へ。(長田豊)

「裏方に徹した球児 最初で最後の試合」

カンテレワンダー 2016年7月4日

グラウンドの片隅で1年生と雑用をこなす、一人の野球部員。北大津高校3年の平井秀弥くんです。入部してからずっと、練習に参加せず裏方に徹しています。



滋賀県立北大津高校。

過去6度甲子園に出場し、去年秋の県大会でも優勝した県内屈指の強豪です。

【宮崎裕也監督】「1年生終わらして…外野のフェンスの破れたやつあるやろ。あれガムテープで直して」

「何でこれ汚れとんねん平井！座れへん！」

平井くんの1日の仕事に、決まったものはありま

せん。

トレーニングの補助や、ノックまで任される“何でも屋”です。

【平井秀弥くん】「やれることは全部自分の役割だと思っています。皆自分で自分のことやってるんで、その足りてない部分を補うっていう…」

平井くんは、幼稚園の時に「ADEM＝急性散在性脳脊髄炎」を発症。発症率は10万人におよそ2人の珍しい病気で、小学生の時には「てんかん」の発作を繰り返しました。

そんな彼が夢中になったのが、4年生の時に始めた「野球」でした。



【平井くんの母・克江さん】「野球始めた頃は心配でした。外にはいないとあかんし、夏は暑いし、ふらふらになったはるし…でも、心配ばかりで何もやらさへんというわけにもいかへんし」
今も定期的な通院と、朝晩2回の薬は欠かせません。

中学以降は症状も落ちつき、甲子園を目指して北大津高校に入学。

しかし入部直後、彼は「裏方に回ってほしい」と

告げられました。

強豪校の激しい練習に体が耐えられず、発作が再発する恐れがあったからです。

【宮崎裕也監督】「病気が命に関わるんでね…下手したら。選手だけが野球じゃないしね。どんな形であれ野球に関わりたいのか、そこは自分で決めろと言った」

【平井秀弥くん】「最初は全然浮いてたっす。やってること全然まったく違うんで。皆がノックしてる時に僕はボール出ししてて。(みんなが) 走ってる時とか僕走れないんで、ずっと独りやった」

周りが厳しい練習をする姿を見ているだけ。いわば、一人「浮いた」状態でした。



それでも野球部を辞めず、裏方の仕事を続けました。

なぜ、ここまで続けることができたのか—

【平井秀弥くん】「(野球が) 好きじゃなかったらやってないですね、やめてますね途中で。どっか吹っ切れてるんでしょうね。このメンバーで夏の甲子園に出場したいっていう気持ちの方が上回ったから、吹っ切れたんでしょうね」

【日和佐凌大主将】「よく動いてくれます、ほんまに何でも。平井自身も、自分でできることは何でもするからっていうふうに言ってるんで、色々やってくれます。大事な仲間やと思ってます」

夏の県大会に向け、20人のベンチ入りメンバーが発表されました。

北大津高校では、毎年県大会が始まる前にベンチに入れなかった3年生の引退試合

「メモリアルゲーム」を行っています。

平井くんも出場できることになりました。高校生活最初で最後の試合。レギュラーメンバーがメッセージを贈ります。

キャプテンの日和佐くんも、ペンを握ります。

「甲子園」。平井くんが活躍すれば、チームが奮い立つ—そう考えた彼なりのエールです。彼は平井くんと、ある”約束”を交わしました。

【日和佐凌大主将】「僕は平井と個人的に、ヒット打つって約束したんで、ヒット打ってほしいです。(平井君は) 僕のバット使ってるんですけど、しっかり縁起物にして夏いきたいです」

【日和佐主将】「あした打てよヒット」

【平井くん】「おれ、このバット磨いたんやで実は」

【日和佐主将】「このバット、今日もめっちゃ打てたし縁起いい。はい」

【平井くん】「いえい。もろたもろた」

平井くんはキャプテンのバットで夜遅くまで素振りを続けました。

メモリアルゲーム当日。

相手は甲子園常連校、京都の強豪・福知山成美高校です。平井くんは「2番セカンド」で先発出場。

両チームともこの日だけは、普段

は”脇役”の選手たちが主役です。晴れ舞台を見に、平井くんの家族も駆けつけました。



平井くんの第1打席。惜しくもサードゴロに倒れます。



(ベンチで迎えられる平井くん)
第2打席はショートゴロに倒れた平井くん。
迎えた、第3打席—
チームメイト「よっしゃいけー！カットいけカット—」
家族の反応「お！」
チームメイト「よっしゃー！！！」
【母・克江さん】「きれいな、ヒット打てましたね」
【父・良彦さん】「いいもん見せてもらいましたね」
チームメイト「平井お前ナイスバッティングやん！」
監督「ナイスバッティング」
【平井秀弥くん】「真っ直ぐだけはって振りぬいたらヒット出たっすね。あとはもう…チームを補助し



て、夏の大会に向けてまたがんばっていきましょう」

病と向き合いチームを支え続けた彼のヒットは、甲子園を目指す仲間を奮い立たせました。

【日和佐主将】「これで夏打てそうです。次は僕らの番なんで。絶対甲子園行くし俺ら」

【平井くん】「甲子園連れてけよ。頼むで！」

【日和佐主将】「ありがと」

多彩な書道作品154点 きょうから書研社一般公募展 東京新聞 2016年7月13日



地域活動支援センターオアシス井田などから寄せられた作品を説明する近野緑洋さん＝川崎市川崎区で

書道の第四十四回書研社一般公募展が十三日から、川崎市川崎区の市教育文化会館で開かれる。今回、最優秀の知事賞は、横須賀市の市村彩香さん（26）が受賞。選考委員の森勝鷹さんから「力強く書かれている。バランスも良い」などと評価された。

同展には、楷書や行書、草書、かな書、隸書、篆書（てんしよ）などバラエティーに富む百五

十四点が寄せられ、会場に展示された。

また、NPO法人の障害者地域活動ホームあさひ（横浜市旭区）、地域活動支援センターオアシス井田（川崎市中原区井田）などからの六点の作品も紹介されている。オアシス井田で書道の指導を務める書研社理事長の近野緑洋さん（68）は「書に親しんで、少しずつ上達し、生活に自信を持って頂きたい」と期待を寄せる。

会期は十七日まで。午前十時～午後六時（最終日は三時半）。入場無料。

そのほかの一般公募の主な入賞者は次の通り。（敬称略）

▽川崎市長賞＝牧野翠風（相模原市）▽県議会議長賞＝奥村治晃（座間市）▽県教育委員会教育長賞＝林口峰月（横須賀市）▽横浜市議会議長賞＝小川多以（横浜市）▽書研社

理事長賞＝本木百合子（川崎市）

社説：永六輔さん／弱い人の思いに心配った 神戸新聞 2016年7月13日

阪神・淡路大震災の後、毎年のように被災地のどこかでその姿を見かけた。避難所や小さな集会所、神社の境内。人の輪の中に、笑いを交えながら、生きることについて前向きに語り掛ける永六輔さんがいた。どれほど多くの人がその言葉に励まされ、力をもらっただろう。

そんな永さんの訃報が届いた。まだまだ言葉を聞きたかったとの思いがこみ上げ、残念でならない。

作詩家、作家として数々の作品を世に送り出し、司会もこなす。テレビやラジオを知り尽くす放送人で旅人。忘れてはならないのは、各地でボランティア活動に従事し、さまざまな団体とつながる社会活動家でもあったことだ。

阪神・淡路の被災地では、被災した障害者に救援金を届けるNPO法人「ゆめ風基金」で呼び掛け人の代表を務めた。基金を募るイベントで「こういう活動は持続させることが大切。じわじわ、息長くやってみましょう」と語っていた。

社会の隅々に視線を注ぎ、弱い人の思いに心を配る。「僕は寺の次男坊で、ずっと福祉の手伝いのようなことをしていた。僕自身も虚弱児でよくいじめられた。だから弱者の気持ちは分かる」。その言葉は被災地での姿に表れていた。

昭和一ケタ世代として、作家の野坂昭如さん、俳優の小沢昭一さんと「戦争を語り伝える会」を結成した。戦争は庶民にとって最悪の厄災である。決して繰り返してはならない。そのために、永さんは「憲法99条を守れ」と強く訴えた。

「天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ」。99条は権力者に憲法順守を命じている。

にもかかわらず、政治家から改憲の話が出ることを憂（うれ）えた。「99条を守れば9条はもちろん、憲法そのものを守ることができる。今、99条を守っているのは天皇だけ」。永さんの言葉は今の政治への痛烈な批判と受け取れる。

よくしゃべり、よく話を聞くコミュニケーションの達人は、人の哀（かな）しみと笑いの効用を知る。一方で反骨精神に富み、頑固おやじのように、おかしいことはおかしいと言い放ってはばからなかった。

いま一度、市井を愛し、市井に生きた人の言葉をかみしめたい。

病院と図書館 西日本新聞 2016年07月13日

病院と図書館。両者に「つながりはない」と思う人は多いかもしれないが、こんな一面もある。福岡市総合図書館（福岡市早良区）が、公民館などの団体相手に千冊までを3～6カ月間貸す「団体貸し出し」制度。その利用団体の中に医療機関が四つ（一つは院内学級）あるのだ。

済生会福岡総合病院（同市中央区）もその一つ。4日にテーブルと椅子を備える院内図書コーナーを改装オープンさせたが、その主力は同制度で借りた文芸書や児童書などの計430冊。「患者さんの気分転換の場になれば」と同病院関係者。

同総合図書館が、同制度を利用する医療機関から協力を得ている例もある。個人が総合図書館で借りた本を総合図書館に出向かなくても返却できる「図書返却ポスト」が九州がんセンター（同市南区）内に今年4月に設置され、地域住民に役立っているのだ。そんなつながりは歓迎。さらに強めてほしい。（西山忠宏）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行